校園長室から

学校教育目標

共に学び共に伸びる子ども

・いのちを大切にできる子ども　・だれとでも仲良く協力し合う子ども
・意欲をもち学習する子ども　・ねばり強くはたらく子ども

令和６年８月30日 第19号

読書感想文 ～「百年の孤独」を読んで～

南米の作家の最も有名な小説がルシア・マルケスの「百年の孤独」。

数年前に存在を知って、たくさんの大型書店を回るもなかなか手にすることができず、京都の少しおしゃれな本屋さんでばったり出会ったときは、本当にうれしかった記憶があります。と言うのも、手にしてしまうと急に熱が冷め書架に3年佇立していました。最近になって文庫本化されブームだとか。そこで慌てて夏休みの読書計画に盛り込みました。

正直申し上げて難しい小説でした。カトリック特有の親の名前をそのまま子どもが受け継いだりするので、同じ名前が何度も出てきて、それぞれに性格が違う。ブェンディアー家の 7 代に渡る大河小説なのでしょうが、南米独特の奇妙な比喩が連発。全編通して本を読みながらなぜか土臭く誇りまみれになった感覚が残ります。

途中で気づいたのです。南米がヨーロッパの支配に苦しみ立ち上がり、独立したものの経済的に苦悩する、その南米の歴史がこの一族に託されていることを。南米の英雄、シモン・ボリバルを想起させる登場人物がいたりして、アジア人の感覚から遠く離れた文章の連続。

訳者の鼓直氏は、スペイン語独特の言葉の使い方を可能な限り尊重して訳したと語っている通り、一つ一つの文章は面白い。

読後、反省しました。これまで海外の文学はヨーロッパやアメリカが中心だったのですが、南米にこんな凄い小説があったとは。本当に視野が狭かったです。大きく目を見開いて世界中の小説を分け隔てなく読む必要があると気づきました。「多文化共生社会」なんて簡単に言いますが、私の中に巣食っていた気づかなかった欧米主義に鉄槌を下してくれた一冊です。